

第4回 日本医師会

# 赤ひげ賞

## 第4回 赤ひげ大賞(5人)

- 高橋昭彦 栃木 ひばりクリニック院長
- 山中修 神奈川 ポーラのクリニック院長
- 土川権三郎 岐阜 丹生川診療所所長
- 高見徹 鳥取 日南町国民健康保険日南病院名誉院長
- 緒方健一 熊本 おがた小児科・内科医院 理事長



日本医師会 横倉義武会長

第4回赤ひげ大賞の受賞者が決定し、日々献身的に地域医療に取り組み続けている5人の先生方を表彰できたことをうれしく思います。

本賞の名称は、山本周五郎氏の有名な時代小説「赤ひげ診療譚」に由来して命名したのですが、「赤ひげ先生」と聞くくと、貧しく不幸な人々に寄り添い、身を粉にして働く頼もしい医師というイメージを抱く方も多いと思います。

高橋昭彦氏が国にあって、病を抱えていても、尊厳を保ちつつ住み慣れた地域で最期まで過ごすためには、頼れる医師の存在が不可欠です。

また、近年は医療の進歩により、命は助かったけれども重度の障害を抱

### 奮闘するかかりつけ医

えて生きる子供が増え、長期にわたる自宅での療養を支えつつ成長を見守る医師や、経済的発展の陰で社会から取り残されてしまった、身寄りのない高齢者に寄り添う医師なども求められています。

今回受賞された先生方は、このような分野において全身全霊で患者さんに関わってこられた、まさに赤ひげ先生と呼ぶにふさわしい方々ばかりです。

団塊の世代が75歳以上となり、日本が高齢化のピークを迎える2025(平成37)年を見据え、今、将来にわたって医療・介護を安心して受けられる社会の構築が急がれています。地域に根ざして住民の健康を支えるかかりつけ医の動きはその土台であり、今後も日本医師会はその活動を支援していききたいと思えます。

日本医師会 赤ひげ大賞 日本医師会と産経新聞社が共催、ジャパンワクチン特別協賛により、長年にわたり地域に密着して人々の健康を支えている医師の功績をたたえ、広く国民に伝えるとともに、次代の日本を支える地域医療の大切さをアピールする事業として平成24年に創設した。全国の都道府県医師会から推薦された「地域のかかりつけ医として住民の疾病予防や健康の保持・増進に努めている医師」を選考委員会で審査し、5人を表彰する。

BSフジで2月21日放送

5人の大賞受賞者の日頃の活動と表彰式の模様を紹介した番組「密着！かかりつけ医たちの奮闘〜第4回赤ひげ大賞受賞者〜」はBSフジで2月21日午後1時から放映予定。

### 高橋昭彦氏 (宇都宮市)



僻地で在宅医療に目覚めた(福島範和撮影)

たかはし・あきひこ ひばりクリニック院長、認定特定非営利活動法人「うりずん理事長。昭和36年、滋賀県長生市生まれ。55歳、自治医科大学。滋賀県で病院と僻地診療所勤務後、宇都宮市の沼尾病院在宅医療部長。平成13年、滋賀県に戻って間もなく、ホスピス研修で米ニューヨーク滞在中に9・11テロに遭遇。翌年5月、宇都宮市にひばりクリニックを開院。在宅診療(オンライン)を行なうが、20年に重症障害児の日中預かり施設「うりずん」を併設。

### 主役になる「お手伝い」

「自治医大を出て滋賀県で僻地医療に従事し、そこで在宅医療に目覚めました」

宇都宮市郊外に「ひばりクリニック」を開院したのは平成14年。午前は来院患者を診て、午後からは訪問診療に出かける毎日だ。

患者のほとんどが口コミでクリニックを知ったという。来院する患者も訪問先の患者の家族も「話をよく聞いてくれる」と口をそろえるが、「患者さんとたわいない会話しかしてない。相手がちゃんと話をしてくださる空気をつくっているだけ」と話す。

院内診療では、入室してきた患者に立ち上がり「あーいさつし、診察が終わると、看護師とともに患者を見送る。風邪気味の女の子(1)を連れて来た若い母親。女の子に「おはよ」とあいさつし、聴診器を当て、「カハさんのお口、アーン」。「のどは赤くないですね」。母親に子供の様子を詳しく尋ね、数種類

### 山中修氏 (横浜市中区)



「ありがとう」の言葉にやりがい(福島範和撮影)

やまなか・おさむ 横浜市中区のポーラのクリニック院長。昭和29年、三重県生まれ。61歳。順天堂大医学部卒。米オハイオ州の病院勤務や横浜市泉区の国際親善総合病院循環器内科部長などを経て、平成16年にポーラのクリニックを開業。横浜市中区・寿地区の簡易宿泊所に住む独居高齢者の訪問診療やみとり医療に尽力する。

### 「だれも独りにしない」

「自分の日常と違う世界がある」とをまざまざと見せつけられたのを感しました」

同年には寿地区の路上生活者や独居高齢者の生きる環境の改善を支援する認定NPO法人「みなぎ」を設立。しばらくは勤務医との「二足のわらじ」を続けていたが、50歳を迎えた16年、寿地区の隣接地域に「ポーラのクリニック」を開業し、訪問診療とみとり医療を始めた。

毎週2回、寿地区や近隣の簡易宿泊所をめぐって独居高齢者を往診する。「食欲どう?」「夜はよく眠れる?」といった問いに

### 土川権三郎氏 (岐阜県高山市)



「人間関係」の大切さを説く(宮川浩和撮影)

### 人間関係で決まる「死」

火曜午後、いつも通り訪問診療の車が診療所を出発する。

「先生が来てくれて助かったりしますよ。次は何を質問しようか、いつも考えとるんです」

腰の手術で下半身に後遺症を抱える男性(86)は肺の機能低下も抱えるが、2週に1度の訪問診療を受ける表情は明るい。「火曜になると、『先生が来るのは今日か?』と聞いてくるんです」と妻(78)が言葉を添える。かゆみを訴える男性の腹部を診察し、「クリームを出すので使ってみて下さい」と処方を追加。7人の診療を終えて戻ったとき、には辺りは真っ暗になっていた。

日本一広い市として知られる岐阜県高山市。北アルプスのふもとに広がる丹生川地区にある丹生川診療所は地域唯一の医療機関だ。この地区では、亡くなる人の3人に1人が自宅で最期を迎える。支える体制があれば自宅でみとりができる。そんな考えが浸

# 会話重ねて心に寄り添う

【主催】日本医師会、産経新聞社 【後援】厚生労働省、フジテレビジョン、BSフジ 【特別協賛】ジャパンワクチン株式会社

## 力をあわせて、未来を守る

ワクチンによる予防こそが、これからの医療の中核になる。

ましてや感染症の予防は、ひとりを守るだけでなく、その周辺の人々、ひいては社会や、この国そのものを守ることになる。

そう信じる私たちは、新しい時代に向かって、力強く歩み続けていきます。

第4回

日本医師会

# 赤ひげ大賞

厳正な審査が行われた選考会  
＝東京都文京区の日本医師会館（宮川浩和撮影）



「赤ひげ大賞」の受賞者選考会は昨年10月、東京都文京区の日本医師会館で開かれ、各都道府県医師会の推薦を受けた27人を5人に絞り込む審査が行われた。選考過程では、長年にわたる地域の医療活動を評価する難しさについて言及する委員が目立った。羽田信吾・昭和館館長は「医療過疎の地域や東日本大震災被災地では、長年にわたる地域の医療活動を評価する難しさについて言及する委員が目立った。羽田信吾・昭和館館長は「医療過疎の地域や東日本大震災被災地では、長年にわたる地域の医療活動を評価する難しさについて言及する委員が目立った。」

## 選考会 「現代の赤ひげ像」を模索

- 選考委員
- 羽田信吾 昭和館館長、宮内庁参与
  - 向井千秋 宇宙航空研究開発機構(JAXA)技術参与、東京理科大学副学長
  - 山田邦子 タレント
  - 小林光恵 作家
  - 神田裕二 厚生労働省医政局長
  - 今村定臣 日本医師会常任理事
  - 石川広己 同常任理事
  - 飯塚浩彦 産経新聞社専務取締役
  - 河合雅司 同論説委員
- オブザーバー
- 長野明 ジャパンワクチン会長

震災の被災地で医療確保のため努力した候補者を評価した」と説明。一方で「被災地では多くの医師が死にものぐるいで尽力した。別に評価する制度があっても良いのではないか」（神田裕二・厚生労働省医政局長）との意見も出た。作家の小林光恵氏は「目立つことなく長年コツコツとやってきた先生は推薦から漏れたり、推薦文が地味になったりしがらみだ」と指摘。宇宙航空研究開発機構技術参与の向井千秋氏も「新しい制度を作ったり、目立つか」と話した。

地域の医療現場で長年にわたり、住民の生活を支えている医師を顕彰する第4回「日本医師会 赤ひげ大賞」の表彰式が29日開かれる。大賞に選ばれた全国各地の5人の医師について、日頃の活動と選考会の模様を紹介する。

### 高見徹氏（鳥取県日南町）



たかみ・とおる 日南町国民健康保険日南病院名誉院長。専門は内科。昭和24年、鳥取県生まれ。66歳。東京大医学部保健学科、鳥取大医学部医学科を卒業。鳥取大付属病院を経て、平成5年日南病院副院長、9年から17年間、院長。27年3月に退職するが、現役医師として外来、訪問診療の現場で地域医療を支え続けている。

### 町全体が病院 住民見守って

「おじいさん、変わりないかえ。顔色はいいね」。ベッドをのぞき込んで声をかけると、寝たきりの高齢男性（96）の表情がほころんだ。自宅で約10年、この父親を介護する女性（65）は「困ればすぐに来てくれ、相談できるが、気の毒な先生だげえ」と信頼を寄せた。多くの会話が交わされる訪問診療。「世間話の中で患者や介護者の生活情報に接し、健康状態を把握します」。患者はもとより、気遣うのは介護者の体調だ。「在宅介護では、介護者の健康や負担軽減に注意を払わないと共倒れになりかねません」。介護疲れなどの兆候があれば、患者を日南病院にショートステイ。病院は常時ベッド5床を空けて待機するようシステム化した。鳥取県日南町は中国山地の奥深くにある。町民約4800人の半数が65歳以上で、高齢化率は約50%を超える。過疎と高齢化が進んだ約30年前から、病院は午前外来診療、午後は訪問診療

# 地域医療の「安心」を支える

### 緒方健一氏（熊本市）



「訪問診療は育児支援でもある」(安元雄太撮影)

### 子供と家族に「生きる希望」

毎週水曜日の終日と金曜日の午前、在宅患者の訪問診療を地道に続ける。特に人工呼吸器を必要とする子供の在宅医療では、バイオニアの存在。患者のQOL（クオリティ・オブ・ライフ）生活の質）向上が信じる道だ。訪問先は筋ジストロフィーなど難病と闘う小さな生命。もしもはかたの子供たち。付き添う訪問看護師との息もあがらない。筋ジストロフィーの充ちさん（25）は15歳の時、呼吸困難感を改善することを目標に行き「訪問呼吸リハビリ」を開始して以来の関係。「本来、子供は家庭のぬくもりの中で成長していき、これが望ましい姿。訪問診療は、育児支援でもあります」と目を細めた。祖父は歯科医、父は内科医という医師の家系。90歳まで開業医を務めた父の背中を見て育ち、自らも医師を目指すようになった。当初は麻酔科だったのが、神奈川県立こども医療センター勤務時代に、小児科病棟を回るようになった。熊本へ戻って勤務医をした後、平成10年に自身の医院を開業した。ライフワークは呼吸管理。きっかけは医学学生時代、旅先で病気を患った母が気管切開をした経験。「風邪から肺炎を発して、一時意識をなくしたが、意識が戻るにつれ、呼吸がうまくいかなくなると苦しんでいました。母は10カ月及んだ看病のまいり。助からなかったが、「適切な呼吸管理ができるようになりたい」と誓った。人工呼吸器を要する子供の支援団体「熊本小児在宅ケア・人工呼吸療法研究会」を設立、会長を務める。25年3月、医院に併設して医療型短期入所施設「かほちゃんクラブ」も開いた。「親たちが休息できる」「止まり木」ができればと思ったし、子供たちには外出も必要。ただ病気が向き合っただけの人生はつまらない。子供と家族に生きる希望を与え続ける。(谷田智恒)



長野明ジャパンワクチン会長 赤ひげ大賞は今回で4回目となりましたが、回を重ねるごとに、日本全国のかかりつけ医の皆さまが地域を支え、住民の生活を支えている存在であることを実感いたします。今回は生まれながら大変な障害を抱えている赤ちゃんの診療とともに、そのご家族の負担軽減にも尽力されている皆さま、病

に伏せながらも在宅を希望する地域住民自身に寄り添い、見守り体制づくりをされている皆さま、そして家族も身寄りも誰一人いない住民の健康管理、診療にとどまらず、日常生活全般への支援にも全力を傾注している皆さまです。受賞者の皆さまに心より敬意を表します。

■推薦方法と推薦基準  
【推薦方法】各都道府県医師会会長が原則として1人または2人を推薦  
【推薦基準】病を診るだけでなく、地域に根付き、その地域のかかりつけ医として、生命の誕生からみとりまで、さまざまな場面で住民の疾病予防や健康の保持・増進に努めている医師▷原則として70歳未満の現役の医師

- 羽田信吾委員 毎回のことながら、献身的に地域医療に携わっている候補者は少なかった。医療を確保するのが難しい地域や分野で努力を続け、関係者とうまく連携し、工夫しながら医療活動に当たっているかどうかを重く見た。そうした医師の尽力があってこそ、地域の医療が守られている。
- 向井千秋委員 「現代の赤ひげ」とはどんな先生なのか悩み続けているが、長年にわたり住民の中に空気のように入り込んでいる先生ではないかと考えた。地域を巻き込み、壁を作らず、医療を求めている人を拒まない。そんな医師を評価したが、候補者は皆、献身的な医療活動をしており、非常に難しい判断だった。
- 山田邦子委員 どの先生も選びきれず、何度も何度も候補者の名簿をひっくり返した。今回は特に、高齢者や子供に献身的に向かっている医師を素直に選ぶことにした。それでも選考が終わると毎回、これで良かったのかモヤモヤしてしまう。今回は候補者の中に女性がいなかったのが少し残念だった。
- 小林光恵委員 私は元看護師なので、看護職として一緒に働きたいと思う先生、他の医師がまねをしたい、自分もできるかも、と思う先生を推した。都道府県医師会から送られてくる推薦状を元に審査をするが、推薦状には書かれていないことも多くあると思う。そうした点をどう評価していくかが課題だ。
- 神田裕二委員 地域に合った幅広い取り組みをしている医師が多かった印象だ。医療に限らず、地域に溶け込むことが大事である。長年地道に取り組んできた、これまで光が当たらない献身的な医師を紹介することには意義がある。地域包括ケアシステム構築に向け、今後も活動を進めてもらいたい。

## ラブベビ.jp

### LovesBaby.jp

愛する赤ちゃんを守るための  
感染症&ワクチン情報サイト

“いつでも どこでも” ママに役立つ  
感染症とワクチンに関する情報サイト  
それが「ラブベビ」

## ワクチンデビューは生後2か月で!!

生まれたての赤ちゃんには免疫があるの？

ワクチンで、どんな病気が防げるの？

ワクチンスケジュールを上手に管理するには？

赤ちゃんのときにかかりやすい感染症って？

ワクチン接種はいつから受けられるの？

ワクチンの詳しい解説やスケジュール管理に便利なツールが満載です。

パソコン スマホ ラブベビ 検索

スケジュール管理アプリ  
「ラブベビ手帳」  
赤ちゃんの生年月日を入力するだけで、0歳から1歳児の接種スケジュールが簡単に作成できます。

iPhone版 Android版

「ラブベビ手帳」はこちらからダウンロードできます。

ジャパンワクチン株式会社は、日本医師会「赤ひげ大賞」へ特別協賛しています。

力をあわせて、未来を守る

## ジャパンワクチン株式会社